

宮崎犀一教授のご退任にあたって

栗原 福也

宮崎犀一教授は、1976年、本学の教授に就任されたが、実はすでに'65年以降ずっと社会学科の非常勤講師として経済学史の講義を担当され、さらに遡って、'55年～'57年には学生のサークル活動である社研のレクチュアラーとして来学されたとのことであるから、教授と東京女子大学のかかわりは40年を超える。

さて、宮崎さん（と書かせてもらう）を本学にお迎えした事情について述べたい。いささか私事にわたるが、1960～62年、私はアムステルダムに遊学した。'61年の春、同じころケンブリッジに研究留学中の宮崎さんは突然アムステルダムに現れ、さらに、その夏、パリに出た私はサント・シャペルのステンドグラスを眺めていた宮崎さんと偶然にも再開し、以来、今日に至るまで、親しくお付き合いをさせて頂いている。あとで分かったことだが、宮崎さんはわが伊藤善市教授と学生時代バスケット部の仲間であった。宮崎さんにご出講をお願いし、のちには教授としてお迎えしたのは、そのような個人的な経緯がきっかけではあったが、より本質的には、当時宮崎さんがもっとも注目を浴びている経済学者であり、氏のご専門が社会学科経済学コースを充実させるのにもっとも相応しいと伊藤教授とともに判断したからである。そのうえ、幸いなことに、宮崎さんはかの社研のレクチュアラー以来、東女のファンであった。

社会学科の紀要『経済と社会』第19号、1991年（宮崎犀一教授退職記念号）に掲載された略歴と業績をご覧頂ければ、宮崎さんの絢爛とも言える多彩な学問的業績の全貌に目を奪われるだろう。いま、氏の学問について十分に語る用意も紙数もないが、宮崎さんがマルクス主義経済学と近代経済学の両者に通じて、きわめて柔軟な思考の持ち主であることは、学生時代の宮崎先生のゼミナールの恩師がマルクス主義経済学と近代経済学の総合を目指して『近代経済学の解明』（岩波文庫）なる名著を発表された杉本栄一先生であったことにもよるであろうか。私の知る若い頃の宮崎さんは未完に終わったマルクス経済学体系を彼の残した体系プランから解明しようとするにであったようだが、氏の研究の成果はライフ・ワーク『経済原論の方法』上・下、未来社（1970、72）において見事に結実し、また『マルクス』経済学者と現代4、日本経済新聞社（1978）で円熟した高い境地を示している。マルクス主義経済学とアダム・スミス以下のイギリス古典派経済学を中心とする経済学史・経済思想史研究者としての宮崎さんの学界での評価は、氏が小林昇、内田義彦両先生とともに『経済学史講座』全三巻、有斐閣（1964～5）の編纂者であることを指摘するだけで充分だろう。

宮崎さんはマルクス経済学の理論的把握と並んで資本主義の生成・発展史にも関心

深く、多くの論文を発表され、さらに現代資本主義や国際経済の動向とその理論的分析にも強い関心を示されている。このことは、国際政治の領域における経済的イシューの重要性が高まっていることとあいまって、宮崎ゼミの学生諸君の多くが国際経済問題を卒業論文に取り上げることにも現れている。

多分、イギリス遊学後の宮崎さんは現代イギリスの政治・経済・思想のウォッチャーであり続け、イギリスのEEC加盟、ポンド切り下げ、英国病、サッチャー主義などについて論じ、あるいはイギリス・ニュー・レフト、新帝国主義、自由帝国主義、ラディカル・エコノミックスなど米英の新しい潮流を日本の学界・思想界にいち早く紹介され、多くの著書・論文を翻訳されている。また、宮崎さんの業績一覧表を見て気が付くことは、書評・紹介の類が実に多いことで、これは氏が勉強家・読書家であることを示すものであろう。

あれほど多くの業績を残されたにもかかわらず、宮崎さんはアカデミズムの世界にだけ閉じこもる、お固い学者先生ではない。研究室の宮崎さんは悠々として大人の趣があり、学問・思想はもとより映画・テレビ・世相万般に至るまでおよそ氏の好奇心を免れるものはなく、氏を取り巻くゆっくりと進む時間の中で談論風発する氏の博覧強記と博識によって、われわれは大いに啓発を受けかつ楽しませて頂いたことを感謝したい。

宮崎さんはまたわれわれの世代の多くがそうであるように、コーヒー店で仲間とだべるのをこよなく愛される戦中派である。西荻、吉祥寺また氏と縁の深い渋谷にある、おしゃれで気のきいたコーヒー店を宮崎さんほど数多く知っている人は少ないだろう。

宮崎さんは学生を愛し、研究指導と学科の運営にも実に熱心に、細かく神経を働かせて尽くされた。近年は学科の枠を越えて大学行政にも参加され、長期計画委員会の委員長として哲学科問題の解決に尽力されたことはわれわれの記憶に残るところであり、図書館長としても重責を担われた。

宮崎さんをご退職になられたが、なお当分のあいだ非常勤講師として講義とゼミの指導に当たって下さる予定である。ますますご健康でお幸せな今後をお祈りするとともに、いましばらく社会学科をお助け頂くようお願いしたい。(5月12日)